

第3回文化・教育委員会 議事録

1. 開催日時 2016年7月14日(木)14時00分～16時00分
2. 開催場所 虎ノ門ヒルズ森タワー9階 会議室TOKYO
3. 出席者

<文化・教育委員>(五十音順)

青柳正規委員長、今中博之委員、榎本智司委員代理新庄恵子様、小山久美委員、
桂文枝委員、絹谷幸二委員、コシノジュンコ委員、真田久委員、SHELLY委員、篠田信子委員、
杉野学委員、銭谷眞美委員、セーラ・マリ・カミングス委員、千宗室委員、田中稔三委員、
深澤晶久委員、松下功委員、宮田慶子委員、村田吉弘委員、山崎貴委員

<臨時委員等>

多田 健一郎 臨時委員(内閣官房東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会推進本部事務局
企画・推進統括官)

磯谷 桂介 臨時委員(文化庁長官官房審議官)

勝又 正秀 臨時委員(スポーツ庁オリンピック・パラリンピック課長)

桃原 慎一郎 臨時委員(東京都生活文化局次長)

堤 雅史 臨時委員(東京都教育庁次長)

<組織委員会>

武藤事務総長、佐藤副事務総長、古宮副事務総長、中村企画財務局長、手島総務局長、
藤澤広報局長、小野スポークスパーソン、小幡企画部長、吉村人事部長

4. 議事次第

1. アクション&レガシープラン(文化・教育)について
(1) アクション&レガシープラン 2016 の策定にむけて
(2) 東京 2020 参画プログラム(仮称)について
2. 今後の文化・教育委員会の運営について
3. TOKYO2020 大会ボランティアプログラムの方向性
4. 小中学生からのポスター募集企画

5. 配布資料

(※資料2-2、資料2-3、資料2-4、資料4につきましては、メインテーブルのみの配布であり非公開とさせていただきます。)

資料1:文化・教育委員会名簿

資料2-1:文化オリンピック事業体系と認証の仕組み

資料2-2:アクション&レガシープラン2016(文化・教育)(案) ※

資料2-3:アクション&レガシープラン2016 アクション一覧表(文化・教育)(案) ※

資料2-4:アクション&レガシープラン2016下半年一覧(文化・教育)(案) ※

資料2-5:東京2020参画プログラム(仮称)について

資料3:今後の文化・教育委員会の運営について

資料4:TOKYO2020大会ボランティアプログラムの方向性 ※

資料5:小中学生からのポスター募集企画

6. 議事録

○武藤事務総長

皆さん、本日は御多用中のところお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。それでは、定刻になりましたので、ただいまから東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会第3回文化・教育委員会を開催いたします。私、冒頭の進行を務めさせていただきます、組織委員会事務総長の武藤敏郎でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

まず初めに、本日の委員会のメディアへの公開についてお知らせいたします。委員の皆様には事前に御案内させていただきましたが、本日の委員会は、より開かれた組織委員会の運営を目指す取組の一環といたしまして、今回記者の方にはフルオープンとさせていただきます。なお、ムービー・スチールの方は、会議の冒頭のみオープンとさせていただきます。今後も文化・教育委員会の情報を積極的に発信していきたいと思っております。可能な限り公開とすることを基本に議題に応じて対応してまいりますので、よろしくお願い申し上げます。

さて御案内のとおり、宮田亮平委員長が文化庁長官に就任されました。その後、青柳正規東京大学名誉教授に委員長に御就任いただきました。どうもありがとうございます。そして羽入佐和子委員が国立国会図書館長に就任されたために、銭谷眞美東京国立博物館長に、全日本中学校長会会長、伊藤俊典委員が御退任されたことを受けまして、榎本智司新会長に、各々新委員に御就任いただきました。大会の成功のために委員の皆様方のお力添えをいただきますようお願いいたします。

また、本日は河野一郎副会長にも御出席いただいております。ありがとうございます。

それでは、まず開会に当たりまして、本委員会の委員長であらせられます東京大学名誉教授、青柳正規先生から一言御挨拶をお願いいたします。よろしくお願いいたします。

○青柳委員長

ありがとうございます。ただいま御紹介いただきました青柳でございます。6月の文化ディスカッショングループ、教育ディスカッショングループにおきましては、文化・教育それぞれのプログラムの認証制度について議論をいただきまいりました。この中でできるだけ多くの団体が、この認証制度によりオリンピック・パラリンピックのプログラムへ参画することを促し、そして2020年に向けた大きな機運を高めていこうという方向性を確認させていただきました。

今日はこれまでの議論を踏まえ、1月に発表したアクション&レガシープラン最終報告と認証制度である東京2020参画プログラム、これはまだ仮称でございますけれども、の確認を行うとともに、今後の委員会の進め方についても御議論をいただきたいと考えております。

なお、本日の議論を経て、今月25日の理事会においてアクション&レガシープランや認証制度についての了承を得た上で公表、または関係する個人・団体等々への周知を行う予定でございます。

いよいよオ大会が間近に迫り、スポーツ界は非常に盛り上がってきております。この機運とともに、文化・芸術の分野や教育の分野においても東京大会に向けたキックオフ、そして全国へのプログラムの展開を行う必要があると考えております。そのためには政府、東京都を初めとする自治体やスポンサー企業、関係団体、そしてこの文化・教育委員会が一丸となって取組を推進していくことが重要だと思います。本日は大変限られた時間ではありますが、忌憚のない御意見をいただきたいと思っております。

皆様のテーブルのところにラベンダーが置いてありますが、これは篠田委員が今日、富良野のほうから持ってきてくださいました。ラベンダーというのは香りが非常に気分を鎮静化するんです。だから、あまり興奮しないようにということかもしれませんけれども、よろしくお願いいたします。

○武藤事務総長

青柳委員長、ありがとうございました。それでは、これから先の議事の進行は青柳委員長をお願いいたします。

○青柳委員長

議事に入る前に、今回初めて御出席いただいた委員の皆様から御挨拶をいただきたいと思っております。羽入委員が御退任されたことを受けて、新たに御就任いただきました東京国立博物館長でいらっしゃる銭谷眞美委員、よろしくお願いいたします。

○銭谷委員

このたび委員に就任させていただきました、東京国立博物館長の銭谷と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

○青柳委員長

ありがとうございます。続きまして、茶道裏千家家元、千宗室委員でございます。よろしくお願いいたします。

○千委員

皆さんこんにちは、千です。今回初めてということになりました。いつも日程をお尋ねいただきまして、私はこの日がいよいよと言うと、必ずこの日はだめだということ以外で外れまして。全く、くじ運が悪いまま延び延びで今日になってしまいました。他意はございません、単に運の問題だけだと思っております。

私は専門がお茶ですけれども、東京オリンピックのときにピキラ・アベベを見て陸上を志し、マモ・ウォルデ、デミシユ・ウォルデを見て、もっと速く走れるのではないかとあって、トレーニングでけがをして、陸上をやめました。オリンピックは夢をたくさん与えてくれます。その後に挫折しても、でも運動をやったよかったという思い出を与えてくれる場だったと思います。そういうようなすばらしい東京オリンピックに、もしお役に立てるならばと思ひまして、この委員を拝命させて

いただいた次第でございます。どうぞ、今後ともよろしく願い申し上げます。

○青柳委員長

どうもお二人ともありがとうございます。今後とも、よろしく願いいたします。また、本日御欠席の榎本智司委員のかわりに代理出席をいただいております、全国中学校長会会長の新庄恵子様です。

○榎本委員代理新庄恵子様

失礼いたします。全日本中学校長会の会長榎本智司は本日公務のため欠席ということで、代理で出席させていただいております。普段は港区立のお台場学園にある中学校の校長をしております。よろしく願いいたします。

○青柳委員長

ありがとうございます。そのほかの委員の方々につきましては、これまで文化・教育委員会や各ディスカッショングループで御面識のある方々だと思っておりますので、配付している資料1委員名簿をもってかえさせていただきたいと思っております。

それでは、ここでスチール・ムービーのプレス関係者の方々は、ここで退室お願いできますでしょうか。ありがとうございます。

(プレス 退室)

○青柳委員長

それでは、本日の議事に入りたいと思っております。本日はアクション&レガシープランについて議事を進めたいと思っております。まず、事務局のほうから御説明よろしく願いいたします。

○小幡部長

事務局から説明をさせていただきます。今日はいろいろ資料をお配りさせていただいておりますが、まず資料2の1から5までのアクション&レガシープラン2016、参画プログラムに関して説明をさせていただきたいと思っております。たくさん資料がございますが、既にディスカッショングループ等で御説明している内容もございますので、簡潔に説明をさせていただきます。

まず、資料2-1を御覧ください。アクション&レガシープランの経緯でございます。昨年来、この委員会でもずっと議論をいただいている中、今年1月の理事会で中間報告をまとめさせていただき、公表いたしました。この後いろいろ検討を進めてきて、今月は文化・教育それぞれのディスカッショングループ、また今日の専門委員会でもいろいろ御意見をいただきたいと思います。それら御意見を踏まえまして、今月の25日に予定されている、組織委員会の理事会で御承認いただきましたら、2016年度の最終版という形で公表することを考えております。

その次のページ、全体概要でございます。御案内のとおり、アクション&レガシープランということで、多くの方々に参画をしていただくアクションをいろいろ展開していく中で2020年に向かって進んでいき、大会を迎え、それをレガシーとして将来にも残していけるような取組を進めていくものでございます。

その下にオールジャパンでの取組とありますとおり、今日も政府の関係、また東京都の関係の臨時委員の方にも来ていただいておりますが、組織委員会は2020で解散をすることになりますので、レガシーとして引き継ぐのは、ずっと残っていただく機関、団体でございます。そういう意味で、この検討の段階から、東京都、政府、パートナー企業、また経済界、JOC、JPC、また文化団体、学校を含めた教育機関、そういったところと一緒にこのプランをまとめてきた形でございます。5本の柱で構成されておりますが、文化・教育はこの真ん中にありますように、このプランの中核的な役割を担っていくものかと考えております。

次のページを御覧いただきたいと思います。

3ページでございますが、この2016の策定に向けた重要な視点ということで三つ掲げております。一つは参画ということで、できるだけ多くの方に関わっていただく。そのために、後ほどまた改めて説明させていただきますが、認証という仕組みを構築していきたいと考えています。また、パラリンピックについては、1964年でも行われましたけれども、今回2回やる都市としては東京が初めてでございます。そういう意味でも、何か新しい形で世界に発信できるものを示していきたいと考えています。

また3ページでございますとおり、2020を挟みまして2018年、2022は冬季でございますが、オリンピックが韓国、中国で開催される。また、2019年にはラグビーのワールドカップ、2021年にはワールドマスターズが関西で開催されます。2018から22を連続した大会として位置づけまして、連携をしながら取組を広げていきたいと思っております。

2020に向けたスケジュールでございますが、このアクション&レガシープラン公表させていただきますと、リオがもうすぐに始まります。リオの大会が8月、9月と行われますので、それが終わった後10月からこのプラン、まさにその中身であるアクションを展開していきたいと思っております。4年間かけて展開していき、直前の2020年にはフェスティバルという形で、その集大成としていろんな取組を行う。そして東京のオリンピック・パラリンピックを迎えていくというようなスケジュールで考えております。

次のページが、この5本柱の一つの文化・教育のプランの中身でございます。中間報告のときと構成は変わっておりますが、文化については、ここにある四つを基本とし、日本文化の再認識と継承・発展、次世代育成と新たな文化芸術の創造、日本文化の世界への発信と国際交流、全国でのあらゆる人の参加・交流と地域の活性化という形で残すべきレガシーという形で考えています。

また教育については、オリンピック・パラリンピックやスポーツの価値の理解、多様性に関する理解、主体的・積極的な参画と大学連携というような形でまとめております。下に、それぞれアクション例ということで掲げさせていただいております。

次の5ページでございますが、今回1月に公表した中間報告から具体的に主に三つの変更、追加で記述を加えて

いるところがございます。一つが先ほど申しましたが、参画、パラリンピック、2020前後の5年間の大会との連携ということで、それぞれ記載内容を加えております。特に参画のところにある認証については、また後で御説明をさせていただきます。

本体は資料2-2にございますとおり、これがプランの本体でございます。中身は中間報告のところから、関係機関とも調整したり、また皆様の御意見を踏まえて修正しているものでございます。後ほど、お時間あるときに御覧いただければと思います。

また、(2)として2020までに想定されるアクション例の一覧の更新ということで、これも中間報告のときにもおつくりしましたが、資料2-3としてお配りさせていただいております。また、資料(3)として2016年度下半期アクション一覧の作成ということで、これは東京都や全国の道府県、パートナー企業などのアクションの一覧を追加して、作成したものでございます。これが資料2-4でございます。こちらを御覧いただくと、いろんなアイデアを各自治体、または政府で考えていただいております。非常に盛りだくさんではございますが、こういったものを今後、アクション&レガシーのプランとして我々と一緒に取り組ませていただければと考えております。

次のページでございますが、中間まとめからいろいろな関係機関、団体とも意見交換を行い、先ほどのような形でパートナー企業、関係自治体のアクションの調査などもしてきたところでございます。

今後2017年度以降、これはアクション&レガシープラン2016でございますので、毎年度このプランを更新していくような形で、より充実をしていきたいと思っております。最終的には2020年の大会が終わった後に、アクション&レガシーレポートということで取りまとめで、東京大会としてのまとめをしていきたいと思っております。

アクション&レガシープランについては以上でございます。

次に資料を三つほど飛ばしていただいて、資料2-5を御覧いただければと思います。東京2020参画プログラム(仮称)ということでございます。

次のページを御覧ください。今、御説明させていただきましたアクション&レガシープランをいかに全国で展開していくのか、そのためのプログラムが、この東京2020参画プログラムでございます。(仮称)と書かせていただいております。いろいろ御意見を聞かれています。もう少しやわらかいといいますが、皆さんと一緒に参加してみようと思ってもらえるような名前にしたほうがいいのではないかと御意見をいただいております。まだ名前については検討中でございますので、何かいいアイデアがあれば、ぜひいただきたいと思っております。

このプログラムが、まさにアクション&レガシープランを具現化するものでございます。具体的には2ページを御覧いただければと思いますが、この2020年を一過性のイベントでなく、できるだけ多くの人に参加していただくということです。そのためにマークを付与する仕組みが、この認証の仕組みになります。組織委員会としてマークを開発し、それを皆さんにつけていただく中で一緒にこのプランに取り組んでいただくという形ができないかと考えております。目的といたしましては、ムーブメントという形で参加が促進すること、さらにはレガシー創出に向けたアクションがいろいろ広がることと考えております。

3ページを御覧ください。この認証、認証という言葉もかたいということで、名称については検討中でございます。このマークを付与する仕組みでございますが、各政府、国、またいろんな団体がやっていただく取組、またイベント、事業そのものにこのマークを使っていただくものになります。後ほど説明させていただきますけれども、東京2020公式プログラムと応援プログラムという二つの種類のプログラムを用意していきたいと思っております。

このプログラムに認証されると、マークを使っていただくということですが、オリンピック・パラリンピックという言葉はマーケティングのルールというのがあります。オリンピック・パラリンピックという言葉自体をあまり自由には使えないというのがルールでございます。しかしこのプログラムになっていただきますと、タイトルに使っていただいたり、また応援プログラムについては説明の中で使っていただくというようなことが可能になるということでございます。

また、我々と一緒にやっていくということで、我々のホームページなどでもPRをさせていただきたいと思っております。いろんな形で一緒に取り組んでいくことができるものということでございます。

4ページが、この体系でございます。2種類のプログラムがあるという、これちょっと細かくなりますけれども、上の公式プログラムと下の応援プログラムということで。上のほうは、実施主体がここにありまして開催都市、東京都、都内区市町村、また国、会場所在地の地方公共団体、JOC、JPC、スポンサー企業ということで、いわばエンブレムそのものが、この主体は使えるというものでございます。このプログラムを、公式プログラムというように位置づけております。

また、応援のほうは、そういったエンブレムそのものが使えない主体ではございますが、例えば公益法人ですとか、開催都市、会場所在地以外の自治体でございますとか、あとは大学とかそういう非営利団体の方々にも、このプログラムとして参加いただく仕組みと考えております。

マーク自体が右に例として、これリオの大会のマークというものでございますが、公式プログラムに付与するマークというのが、このOCOGマークといって、The Tokyo Organising Committee of the Olympic and Paralympic Gamesということで、組織委員会のマークというものでございます。これはエンブレムとセットの形で、このCelebraという文言、英語でCelebrationです。その下にCULTURAと書いてありますが、リオ大会における文化のマークでございますが、そういうエンブレムとセットでマークを使っていただけるというものでございます。

その下がノンコマーシャルマーク、NCマークということで、エンブレムそのものはルールで使えないということでございますが、ここにCelebraというような同じような形で、東京2020と入れたマークを皆さんに使っていただく。エンブレムそのものは使えませんが、それにかわるマークとして皆さんに使っていただき、そういう限られた主体だけじゃなくて、広がりをもった形で全国展開できるものとして考えております。

次のページ以降が、この中身の概要でございます。実施基礎要件、公益性ですとか非営利性、また大会ビジョンということで我々のビジョンのコンセプトに合致しているとか、そういったものが一つの要件として考えております。

次に、その中身が具体的に書かれております。一つ、オリンピック・パラリンピックの特有のルールといいますが、なかなか難しいところでもございますが、スポンサーのマーケティングルールを遵守していただくということが必要になります。具体的に申し上げますと、我々のパートナーであります企業以外の企業の方には、直接なかなか参加していただくことが難しい仕組みになっておりまして、そこを気をつけながら展開をしていく必要があるということでございます。

次のページも申請の概要、細かいものでございますので、ここは飛ばしていただきまして8ページでございます。今後

のスケジュールということで、7月の理事会で御承認いただきますと準備を進めて、10月からアクションを展開していきたいと思っております。最初は、全部の申請を受け付けるというのが、なかなか体制としても難しい面もございます。まずは政府や開催都市、スポンサー企業、あとはJOC、JPC、そういったここにございますような団体の行うアクションを認証させていただき、キックオフをしていきたいと思っております。大会に向けて4年間ございますので、その中で最終的には全国のいろんな団体が、このプログラムに参加して盛り上げていただけるようにしていきたいと考えております。

9ページ以降は文化オリンピアドということで、文化のビジョン、また名称でございます。オリンピアドということで、この文化プログラムの名称としては、東京2020文化オリンピアドという言葉で広げていきたいと思っております。

10ページにコンセプトがございますが、これは先ほどのものと繰り返しですので、飛ばさせていただきます。

11ページには、認証の対象になるような取組の内容について記載しております。

12ページが教育プログラムでございます。教育プログラムについてもビジョンを書いておりますが、ここについては、プログラムの愛称として、「よい、ドン！」ということで展開をしていきたいと思っております。小中学校で基本的には、高校もやっていますが、子どもたちが取り組むプログラムでございますので、愛称としても少しわかりやすく、子どもたちにも親しみを持っていただけるような愛称として、「よい、ドン！」ということで展開していきたいと思っております。

13ページ、14ページには、教育プログラムのコンセプトとか、またその内容について少し記述しております。

15ページに今後の展開ということでござりますが、10月以降このアクションが展開されていきます。やっぱり2016年から100点満点という形で取り組むというのは、なかなか難しいわけございますので、最初は、例えば50点とかそれぐらいであっても、4年間かけて100点を目指して頑張るということで、出てきたアクションを皆様にもいろいろ見ていただき、こうしたいいんじゃないかと、アイデアをいろいろ出していただきながら、よりよいものにしていくような形で進めていきたいと思っております。

最後に、16ページに2016年下半期以降に予定されているアクションの例ということで記載をさせていただいております。これは、先ほどの資料2-4東京都を含めた自治体、また政府から出てきたアクションの例から抜粋したものでございます。

例えば文化ですと、若者や外国人が体験できるワークショップ、伝統と現代の芸能を融合したフェスティバル。また、新人芸術家の発掘・育成とか、障がい者芸術と最先端テクノロジーの融合。また、演劇やダンスなどの舞台芸術を国際共同制作すること。また、地域密着型芸術フェスティバルというような形で、さまざまなアイデアがもう既に出されております。こういった取組を認証させていただき、一緒になって取り組み、それをいろんな形で紹介をし、それを見た、それまで取り組んでない方々にも参考に取り組んでいただくというような形で2016、17、18、19、4年間かけて広げていくことができたいと思っております。

また、教育については主に小・中・高・特別支援学校で、後ほど、東京都教育委員会のほうから御説明いただけると思います。机上に教材を配付させていただいておりますが、このような教材を活用してオリンピック・パラリンピック教育を展開していただくということ。また、障がい者スポーツの観戦ですとか、留学生、大使館との交流。また、地域でさまざまに行われるスポーツ大会、ボランティア活動など、こちらについてもいろんな取組が既に考えていただき、予定されているところでございます。

大変駆け足で恐縮でございますが、アクション&レガシープラン2016と参画プログラムの説明でございます。

○青柳委員長

どうもありがとうございます。それでは、ここから委員の皆様の間で御議論をいただきたいと思っております。ただいまの説明がございましたアクション&レガシープラン、それから東京2020参画プログラムについて、委員の皆様方より自由に御意見いただきたいと思っております。

盛りだくさんの御説明だったので、頭の整理が必要かもしれませんが、例えばこんなことをやったほうがいいのかとか、もうちょっとこういう考え方を入れたほうがいいのか等、いろいろあると思っておりますので、何でもどうぞ。

○真田委員

質問も含めてなんですが、認証プログラムのところで、公式プログラム、それから応援プログラムとあります。資料でいいますと資料2-5の4ページになるかと思っております。こういう付与マークを設けるということなのですが、これはアクション&レガシープランの中で、文化プログラムとか教育プログラムなども全部一緒にこのようなマークになるのでしょうか。あるいは、教育プログラムと文化プログラムなどと分けてのマークになるのでしょうか。

○中村局長

ありがとうございます。まさに今、検討しております。基本的には同じようなイメージですが、色が違ったり文字が違ったりとか、バリエーションを幾つか用意しようと思っております。5本の柱ではござりますが、文化と教育は別々を考えております。あとは街づくりと持続可能性であるとか、復興とオールジャパンとか、幾つか区分けをしまして、八つぐらいのバリエーションにしようかと思っております。いずれにしても文化と教育は分けようと思っております。

○真田委員

はい、わかりました。それと最初の御説明で、東京パラリンピックが世界で初めて二度目の開催となっておりますが実はそうではありませんで、インスブルックが84年と88年に冬季の大会を続けてございました。私も最近知ったんですけども。ですから、夏季大会に限っては二度目ということになるかと思っております。

○青柳委員長

どうも貴重な御指摘ありがとうございます、存じ上げませんでした。

○今中委員

今中です、よろしくお願いいたします。初めに紹介していただいたアクション&レガシープラン2016についての2ペー

ジ目で、オールジャパンでの取組と書いてあるんですけども、この図式だけを見れば、この専門委員会が東京、政府、パートナー、経済界、JOC、云々かんぬんを中心になるということでしょうか。

東京都の事案というのを、ホームページ等を見させてもらってるんですけども、非常に先行的に今実施されてます。僕、政府のほうの文化庁と厚労省のほうにも入っているんですけども、それも先行してやっている部分があるのです。そもそも、この委員会の位置づけを前回の文化委員会でもちょっとお話しになったんですけども。全体を統括して見るのはこの委員会であるという図式に見えますが、それに間違いのない、最終のディレクションはここですということですか。

○中村局長

ありがとうございます。統括とかディレクションという感じの印象は持っておりませんが。今中委員がおっしゃいましたように、東京都も政府も、あるいはいろんな機関が積極的に活動をされておりまして、ばらばらにやっていて全体像がわからないという声がありますので、まずこの委員会で全体のコンセプトを整理したり、一覧にまとめたりするというのが一つです。

もう一つは、やはりせつかく2020年に向けての取組、皆さんそういう思いでやっております。今、申し上げたようなマークを広げて、2020年の大会とそれぞれのイベントを結びつけようというところを、この委員会でやっていただくという意味では、全部をカバーしておりますが、実際にイベントなり活動するのは、それぞれの都なり国などが積極的にやっていただくという、そういう相互協調関係だというイメージを持っております。

○今中委員

そうですか。だからこの委員会がエンブレムもそうでしたけれども、覚悟を決めるんだというふうな委員会かなと思ったんですけども、もうそれはパラレルで動いていくということですね。

○中村局長

はい。それぞれのいろいろな取組について、我々のほうでもいい取組があれば、この委員会で紹介いたしまして、もしアドバイスがございましたら、今日来ていただいた都や国の方々にフィードバックしまして、そういう相互関係の双方向の中でよりよい取組を、2020年に向けてつくっていききたいということです。どちらが上でどちらが下とか、そういうイメージでないほうが全国的な広がりを持つてのではないかと考えております。

○今中委員

例えば東京都でやっていらっしゃる、例えば障がい者掛けるアートみたいな取組も、非常に先行されているのです。文化庁もやっているのですが、それが若干、内容が違うのです。その辺の整理整頓というか交通整理をどこかの委員会が今後しなければならぬだろうと、というのが一つ思います。

もう一つは、先ほど述べられたアクションというのは非常にたくさんあるんですけども、今日、説明してもらったPDFで送ってもらったデータを見てみると、この委員会1年に2回を暫定的にしはると書いてあったんですけども。たかだか1年に2回でアクションの整理はできますか。

○中村局長

そこは、ぜひ御相談をさせてください。五つの委員会ございまして、この委員会も教育と文化に分かれています。そのほかにもディスカッショングループも幾つか分かれておりますので、そういったものはもうちょっと細かにやりたいと思っております。この皆様が集まる、勢ぞろいする委員会は、例えばこの年末に秋の陣でどんな取組が全国で行われて、その次の半年どれだけ行われているのか、主なものを紹介していきたくて考えております。今、今中委員におっしゃっていただいたように、この取組とこの取組、両方いいけれども、もうちょっと連携を取ったほうがいいんじゃないかというものをアドバイスいただければ、またそれをフィードバックしていきたくて考えております。継続が大事でございますので、そういった取組、アクションはなるべく毎年やってくださいということをお願いしております。次回やるときには、そのアドバイスをぜひ勘案して、次の年の取組にやっていただきたいということで、節目節目は年2回ですが、もうちょっときめ細かに集まるということであれば、そのようにしたいと思っております。

○コシノジュンコ委員

昔はアートのオリンピックというふうに言われていたんですけども、スポーツと文化、文化イコールアートという、アートに関しては大変考え方が広いです。どこで何をやったらいいかという具体的なプランがあっても、大変スケールが大きくなると思うんです。それぞれ地方でも、世界でも考えていると思います。日本だけではなくて、例えば海外でもそういったオリンピックを意識した、看板にした活動ということは、日本の伝統文化を世界に持っていくということは一番世界に対してわかりやすい方法なんです。それも、この新しい認証マークをつけてやるべきだと思いますけれども、そこまで含むでしょうか。

それともう一つ、今、国立博物館の館長いらっしゃいますが、例えば日本の国立の博物館や美術館の休日活用です。そういうものを、やはりどこで何をやるかという場所が大変、パブリックなところでやるとすれば、それは広場とかいろいろあります。それも公共のものですから大変ですけども。例えばオリンピックまでに開放するとか、そういう美術館の休日を開放するとか。そういう場所も、国のほうで開放するような傾向にもっていかたいなと思っております。

また、先日、私、囲碁のペア碁、その審査員ではないんですけども関わりまして、世界大会なんです。そのときオリンピックって使えないので、ワールドカップというふう言葉を使ったんですけども。頭脳のオリンピック、頭脳のワールドカップと言われているわけです。やっぱりそういった日本の、これは中国からですが、伝統の中にももちろん入るし、物すごく幅が広いと思います。ですから、その次にワールドカップをオリンピックで使っているのかどうかとか、そういうこともあります。大変切りがないぐらい広いと思いますので、どこまでどんな範囲でできるかというふうに。やっぱりやる限りは、独特のオリジナリティーを持ったものをやるということで、繰り返しとかコピーとかじゃなくて、独特のものをやるということを条件に、何か条件があってもいいかなと思うんです。

○青柳委員長

ありがとうございます。今、話題になりました国立博物館で何か特に考えていらっしゃることはあるのでしょうか。

○銭谷委員

私ども博物館全体で、東京オリンピックが2020年ですので、その前年の2019年に京都で、世界で3年に1回開かれる博物館の世界大会というのがありまして、それを京都で開催しようと考えております。これは実は、7月3日から今回の博物館世界大会、イタリアのミラノであったんですが、ちょうどその3年後の2019年の大会を京都でやろうということで、日本の博物館会、美術館会、みんな全力を挙げて、1週間いろんなイベントをやったり。もちろん京都が主会場ですけれども、それ以外の各地の博物館で2,000から3,000ぐらい外国からお客様来ると思っていますので、そういった人たちに対していろんな日本の紹介をしたり、それからオリンピックに向けた、少し前に元気つけようかなというようなことを考えております。

それから、それぞれの博物館がオリンピックに向けてどういうイベントをやるかというのは、これからそれぞれがみんな考えていくことじゃないかと思えます。その関係で、教えていただければと思うことがあるので、逆に質問してよろしゅうございますか。

私は初めて参加したので、とんちんかんな質問かもしれないのですが、先ほどの資料の2-5を拝見いたしますと、この東京2020参画プログラムというのは、大きくは認証を受けたプログラムというのがそれに当たるということになるんですね。そうすると、その認証を受けるプログラムというのが大きくは二つあって。一つは東京2020公式プログラム、それからもう一つが東京2020応援プログラムということで。これは多分、主催者とスポンサーとの関係で、いずれかに認証プログラムは区分されると、こういう理解でよろしいのかどうかということ。これは、申請に基づいて組織委員会が認証するという理解でいいのかどうかというのが質問の第1点でございます。

それから第2点は、それとはまた別に9ページから文化オリンピックというの、教育プログラムというのが出てまいります。これ先ほどもちょっと御質問があったようですが、この先ほどの認証プログラムというのは、結局その文化オリンピックか教育プログラムのいずれかになるということなのか。それとも、この文化オリンピックと教育プログラムというのは、また別の概念なのかどうかです。そこをもう一度、ちょっとわかりやすく教えていただければありがたいなと。恐らく各博物館も、私も立場でいろいろ、この認証プログラムになりたいなと、これから考えるのだろうと思うんです。

例えば今、私どもの東京国立博物館で行ってますのは、古代ギリシャ展というのをやっているんです。これは9月で終わるんですけど、実はオリンピック発祥のギリシャを扱ってまして。古代オリンピックを随分取り上げて、それに関連したいろんな作品展示をしております。オリンピック理解という意味からも、もし10月以降だったら我々も参加したいなと、思うものですから。ちょっとその辺、二つの質問を教えていただければありがたいなというふうに思う次第でございます。

○中村局長

ありがとうございます。また、第1点でございますけれども、おっしゃるとおり、この2-5の4ページにあります公式のプログラムと応援のプログラムは、実施主体によっての区分でございます。経緯を申しますと、そもそもは上しかなかったのでございます。開催都市であるとか、JOC、JPCとかスポンサー企業、いわゆるステークホルダーのイベントしかそういう認証の対象にならなかったわけでございます。しかしロンドン大会以降、それだけではなくて、より広いステークホルダー以外のものにも広げようということでつくりましたのが、下の応援プログラムでございます。それぞれの実施主体が申請していただいたものを、組織委員会が認証をするという仕組みを考えております。

もう一つは、文化オリンピックと教育プログラムの関係でございますが、どちらも、この参画プログラムのパーツを占めておりまして、参画プログラムの中で五つの柱を設けております。その五つと申しますのは、資料2-1の2ページ目の下にありまして、5本の柱ということで、スポーツと健康、街づくりと持続可能性、文化・教育、経済・テクノロジー、復興・オールジャパン・世界への発信。参画プログラムは、この五つを全部統合した概念でございます。その中の参画プログラムの中の具体的なアクションとして文化に関係するものを文化オリンピックと呼ばせていただいて、教育に関係するものを教育プログラムと呼ばせていただいております。

同じように、例えばスポーツプログラムとか、持続可能性プログラムといった分類はさせていただきます。その分類も基本的には博物館等が申請されるときに、これは教育関係であるとか、これは文化関係であるということであれば、そのとおりにマークを使っていたらこうというふうに考えております。

○山崎委員

二つ質問があるのですが、一つはこの認証マークなんですが、デザインというか、どういうものになるかというのは、どういう流れで決まっていくのかということを知りたいです。

それともう一つは、前回もちょっとそういう話になったと思うんですけど、やっぱりなかなかみんなが知らないというか、知っている人たちはすごく知っているんですけど、知らない人たちがすごくたくさんいるという中で、やっぱりみんな参加できるのだったら参加したいと思う、どういうことがあって、どういうふうにすればそれに参加できるかということに関して、知りたい人というか。まだ、こういうことがあるということを知らない人というのは、まだすごくたくさんいると思えます。そういう人たちに伝えるためのPRというか、そういうことに関しては、今後どのようなことを考えているのかということを知っていただきたいです。

○中村局長

ありがとうございます。第1点のデザインについてでございます。資料の2-5の4ページ目にありまして、説明の中でリオの例を御紹介いたしました。イメージとしてはこれをどうアレンジするかということで。我々のエンブレムが前にありますが、オリンピックとパラリンピックがございまして。これを一部取り込んで、ちょっとアレンジを加えて公式プログラムのOCOGマークをつくりたいと思っております。

また、さらにこのマークそのものは難しいかもしれませんが、それを想起させるようなものをNCマークとしてつくっていかうと思っております。具体的には、このブランド戦略の我々のパートナーとなるような会社をこれから選定してまいろうと思っております、そこを相談しながらつくっていかうと考えております。10月からこの参画プログラムが始まりますので、その前には、少なくともこのOCOGマークについてはお披露目をしたいと考えております。

もう一つ、どう周知していただくかというのは、非常に大事な課題です。この文化と教育のディスカッショングループでも、前もそういった御指摘をいただきました。我々も、これはかなり制度に特化した、かなり説明調の資料になっておりますけれども、ごく簡単な二、三枚、四枚ぐらいの資料をこれから用意しようと思っております。最大のメッセージは、2020年大会の関係するプログラムというのは、2020年ではなくて、今年の秋から2020年大会が始まるみたいな、それは全国津々浦々で、文化でも教育でもスポーツでも、いろんな取組があるんだと、みんなで広げていかうという、そのシンプルな説明資料を、この夏から展開しようと思っております。

○山崎委員

それはどういうところに配布するとか、配布という形ですか。それとも、もっと何か違う力を使っている人々に伝わるようにするのでしょうか。

○中村局長

配布であるとか、あるいはホームページにも掲載予定です。あとは、組織委員会がいろんなところで広報媒体に出るときには、そういうメッセージを出していきたいと考えております。この秋から始まるんですよというようなメッセージは出していきたいと思っております。

○深澤委員

この公式プログラムと応援プログラムに関してのところなのですが、例えば大学ですと、多分応援プログラムのほうの組織体になるのではないかなと思います。また、オリンピックの本番のときのことを考えると、今の高校生や中学生たちが大学生となって、ボランティアなどとして大きく参画してもらうことが期待できるわけで、このような子どもたちが、これからどれだけ盛り上がっていくかということが大事だと思います。

大学は、下の応援プログラムの実施主体になるのではないかなと思います。もちろんエンブレムの使用制限というのはいろいろあるので、ハードルが高いことは認識していますが、少なくとも今の段階でリオのマークを見れば、応援プログラムの方は、オリンピック・パラリンピックと結びつかないマークにしか見えません。学生たちと話していると、このエンブレムをきちっと認証してもらってというのが、みんなで取り組むという意味では一つのモチベーションアップの象徴になるんじゃないかということもあると思います。もう工夫できないかなということ考えたのが一つです。

それから大学連携ということについては、前回の教育ディスカッショングループでも中村局長から初めての試みなので、様々なことをこれから詰めていくというお話がありました。先ほど今中委員のお話のように、もしできましたら教育ディスカッショングループは少し頻繁に開いていただくと考えています。というのは前回教育DGの会議における昨年の報告で、大学連携というのはスタートしてから2年進んでいるわけです。ところが、報告した大学の4割が、のぼりを掲出しているところまでとどまらず、まだ具体的に何をやっていいかということで、今、悩んでいるところだと思っております。

ましてやその大学連携、大学同士を横をつなげようとする、いろいろな課題があるので、これについては具体的な認証が始まってからというよりは、もう少し具体的な議論を行なって、多くの大学が取り組めるようにしないと、首都圏でもまだまだですから。ましてや東京を離れますと、オリンピックそのものに関する関心がまだまだ非常に薄いところで、あつという間に4年が過ぎると思います。それについて、ぜひこれからディスカッションをさせていただけたらと思っております。

この資料を見ますと、こちらのアクション&レガシープラン2016の4ページのところまでは、「主体的、積極的な参画と大学連携」という言葉が残っているんです。それから、こちらの参画プログラムの仮称のほうにつきましても、13ページのところまでは三つ目のコンセプトに「主体的、積極的な参画と大学連携」という言葉が記載されているんですが。最後の14の認証対象となる取組にいきますと、③のところは「主体的・積極的な参画」でとどまらず、大学連携という言葉が、ここで消えてしまっているのです。ですから、大学連携の位置づけをどうするのかということについて、私もこの委員としては非常に責任がありますので、この辺りはぜひディスカッション、それも少し頻繁に重ねながら大学連携が本当に機能するように、ぜひ一緒にいろいろ議論させていただいたり、アドバイスをいただいたりしながら盛り上げていきたいと思っておりますので、どうかよろしくお願ひしたいと思います。

○絹谷委員

結局、その大学連携にしましても、地方と東京の関係にしましても、何かつながってこないんです。東京ではやっているけど、地方では言われるから参加しているんだというふうな感じになってくるのが、今地方を考える時代、そういう時代にあつて。例えばオリンピックのマークをもらって、例えば地方でやっているお祭り、これだけオリンピック協賛なんだよというやつ、そういうことでもオリンピックをやっている東京とつながってこない。

あるいは絵を例えば公募すると、オリンピックについて描いてみよう。それを東京の美術館のどこか、休みの日に展示してもいいですし、何してもいいのですが、それに入選した人は、オリンピックのどこか席を確保できるようにするとか。要するに地方で行われること、あるいはいろんな部署で行われることが東京に引っ張ってこれて、東京からオリンピックの会場に引っ張っていけるという。そういうルートが欲しいなと思うんです。

例えば今日は博多、山笠ですか、というのがありますが、博多でやっているということで、例えば外国の人なんかは見にいこうと思つた、この40日間の期間の中でスポーツを見るほうが大切ですから見に行かない。そうすると、地方に何も影響がない。そういう場面を想定しましたら、例えばこういうことができるかどうか知りませんが、山笠の台を1台銀座で走らせるとか、あるいは会場を走らせれば一番いいわけですが。全国のお祭りの車1台、関東でもいいですし、深川でもいいですが、そういうものがいわゆるこの40日間に来られる人の目に触れさすということでは

方を認識させるというふうなことも大切なんじゃないかと思うんです。つまり地方と東京、オリンピックというふう考えた場合、地方はそれを参画してやっていけばいいや、マークをあげるよ、それだけではとても血の通ったものにならない、こういう気がするんです。

それからもう一つは、今、私が審査員している品質保証協会はユニセフと協力して、全世界の子どもたちの絵画を集めています。これは約6万点、世界から集まります。それでこの会は、地球の未来をどうしたらいいかというテーマがあるんです。それで都市ごとに、そのテーマにあわせて世界の子どもたちが絵を描いていく。こういうことをやっている団体には、こちらの団体から、できればスポーツと平和についてとか、そういうテーマをこちらのほうからプレゼンテーションすると。東京、これから先に何か世界中の人たちのスポーツに対する思い、芸術に対する思いを描いていただくというふうにすれば、そして入賞した人にはオリンピックのどこか座席を少し与えるとかです。そういうふうな、遠くと近くというものを非常にこの一方的ではなしに、何か血の通ったものにしていただければいいなど。そういう認証のマークというものは、それは大変重要なことは重要なんですけども。それについて何か保障といったらおかしいんですけども、何かそういう、そのつながりを、この組織委員会で考えていただければいいかなと、そういうふうな思っております。

○青柳委員長

ありがとうございます。確かにおっしゃるとおり、ただ参画するだけではなく、全体の中の一員となって、ある興奮を持ってアクションできることが一番のすばらしさです。ですから、それはぜひいろいろ考えていきたいと思っております。

○松下委員

いろいろ進んでいらっしゃるなと思って、今年はオリンピックイヤーですから、いよいよやって来るんだという気分が上がり、実は私はわくわくしております。私自身はいろんなところで申し上げているように、我慢できないから8月にいろんな企画をやってしまうおつもりです。それで動いていくと、今御意見がいろいろ出たように、地方を忘れないようにするというのが大事だと思います。

さっきコシノさんもおっしゃったんですけど、アジアに私が行くと、みんな「オリンピック、へえ」って何の興味もないどころか、東京で開催されることすら知らない状態です。いろんなところで申し上げるんですけど、アジアでオリンピック開催しないし、選手は行かない。今私が考えているのは、この間提案してきたんですけど、国を超えて一緒にやろうと思っているんです。そういうのも認証できるような、何かシステムを作ってほしいです。やはりどうも東京に集中してしまうような気がします。

これを見ていると、公式プログラム、応援プログラム、以前、多分青柳さんが長官のときでしょうか、20万件というお話がありましたけど、これは生きていますか。だとしたら、これで20万件いくかなという心配があります。今、大学連携も入れると、非営利団体、これだけではなく、もっとやわらかいものとかも参画できるようにしたらいいのでは。特に日本は、地方という意味で島は参画するのは難しいと思います。僕は、日本の島を元気にするべきだと思って、日本列島島プロジェクトって、島の子どもたちがここに参加してくるというようなことを考えておまして。みんな参加できるといって、一番は子どもだと思っております。東京都がやってらっしゃるので、それが全国規模にいくといいなと思って。今、地球規模のお話があったので、やっぱりこれは日本のオリンピックじゃなくて、アジアのオリンピック、世界のオリンピックと言えるように、やっぱりいろんな人が参画できるものにしていけたら。ちなみにその20万件って、まだ生きていますか。

○青柳委員長

あれはいろいろな経緯がありまして。最初にロンドンオリンピックは12万件という計算があったんです。それをちょっとオーバーしようと思ったら、最近になると、その12万件というカウントをした人が、それほどでもなかったというような意見もあって、少し揺らいでいます。だけど、目標はあくまでもそうです。

それから、この二つのものと、それ以外にbeyond2020というようなものも、いろいろありますから。それを足していくと、かなりの数になるとは考えております。

○松下委員

20万件というのは、非常にいいと思っているんです。実は、それだけ日本全国が参画、だからこれがアジアとか、さっきコシノさんがおっしゃったので、世界の方々も参加するものも数える。例えば年間どのぐらいとかいう目標値はある程度決めないと、4年間というものは漠然とし過ぎているような気がします。そういう計画をもうちょっとはっきりしたほうが見えて来ますし。beyondは、今はbeyondもわかっている人もわかっていない人もいっぱいいらっしゃる。もうそろそろ来年ぐらいに、目標のこういうものが何十万件みたいになったらはっきりするかなという気がします。

○青柳委員長

わかりました。それでは今の御意見の中で、やっぱりこの組織委員会と東京都と、それから政府と、それから地方自治体との連絡を密にしながら、今、おっしゃってくださったような連携を積み上げて、どれぐらいになるかということも考えていきたいと思っております。

それから今、皆さんの御発言で大体問題点が出てきていて、大学連携をどうしていくのか、それから発信をどうするのか、それから地方とのつながりをどうするのか、もっともっと厚く参加ができるようにしたらいいんじゃないか。それから海外との連携をどうするのか、この四つが大体、今、皆さんが御指摘いただいたことだと思いますので。この辺を、事務とも詰めながら次回、皆さんにいろいろ御報告、また御意見をいただきたいと思っております。

ここで、先ほど今中委員もおっしゃっていましたが、東京都があるところ先行していることもありますので、少し東京都のほうから紹介いただきたいと思っております。それはオリンピック・パラリンピック学習読本について東京都教育庁の次長、堤委員のほうから御説明をいただきたいと思っております。そして、またその後、政府、東京都の臨時委員にもぜひ発言をいただきたいと思っております。まず、堤委員のほうからよろしく願います。

○堤臨時委員

東京都の教育庁の次長をしております堤でございます。本日から臨時委員として参画をさせていただいております。よろしくお願いいたします。

先生方のお手元に、今、御覧いただいている方もいらっしゃるかもしれませんが、私ども学習読本をつくりまして、冊子になっておりますのが小学校編、中学校編、高等学校編。それから一番上のパンフレット状のものは、小学校の低学年向けのものでございます。私ども開催都市といたしまして、やはり今年リオ、もう4年前に入るということで、なるべく早く子供たちに学習に取り組んでもらいたい。組織委員会の皆様ともいろいろ御相談をしたのですが、リオが終わってからということになりますと、日本の学校の制度ですと、どうしても年度途中から始まることになってしまいますので、それよりは、やはり4月の学期初めから、きちんと学ぶことを始めたいという考え方のもとに、昨年度この読本をつくりまして、昨年度中に全て印刷をして、全ての学校に配っております。冊子のほうは、小学校4年生以上ですので、大体全体で、公立学校だけで66万4,000冊を、それぞれ学齢に応じてお配りしております。

それから、当然、都内の場合は、半数以上は私学に通うお子さんたちがおいでになりますので、私学にも全てお配りをいたしました。それから、国立の学校に通っておられる方にもお配りをしております。ですので、もしこの委員の皆様の中に、御親族で都内に通っておられる学齢期のお子さんにお聞きいただければ、持っているよというふうになっているはずでございます。

こちらのアクション&レガシープランにも明記していただきましたけれども、私ども四つのテーマと四つのアクションということで、オリンピック・パラリンピックの精神、それからスポーツ、文化、環境。それを学ぶ、する、観る、支えるという四つのアクションでやっていこうということで、この学習読本は学ぶという、最も基本的な部分を早く子供たちが取り組むことによって、それから自分でやってみよう、ボランティアに出てみよう、ひいてはオリンピック選手として活躍してみようという、気運を盛り上げたいということをつくったものでございます。

特に我々、やはり子供たちが一番、参加意識を持ってできるのは、支えるという部分だと思っておりますので、ボランティアで何らかの形で出ていけないかということ、子供たち自身が思えるような学習をしてもらいたいという意味を込めまして、今回つくらせていただきました。

こちらにつきましては、実は発行しましてからいろいろなお問い合わせを私どもにもいただきまして、中身、割と好意的に評価もいただいております。また売らないのかとか、そのようなお問い合わせもございまして、中にございます写真等の著作権が、全て都内の子供たちの教育のために使わせていただくという条件で、御提供をいただいているものですから、なかなかお売りするような形にはなっておりません。

ただ現在、組織委員会事務局と調整をさせていただいて、組織委員会のほうで、少なくとも全国の学校に使えるような形で、御調整いただいている形でございます。写真等は他からいただいたものです。当然それぞれ著作権等があるんですけれども、文章自体は、全て都教育委員会のオリジナルのものでございますので、もし全国でお使いになるということであれば、我々できるだけ全面的に組織委員会に協力をさせていただきたいと思っておりますので、先ほど地方との関係というようなお話もございましたけれども、その辺も含めまして、東京都教育委員会として都内の学校はもとより、全国的に何かお手伝いできるようなことがあればご協力したいと思っております。

いずれにしても、もし委員の皆様で御覧になられて、こういうところはこうしていったらいいんじゃないかというようなことがあれば、我々、読本自体もどんどんブラッシュアップしていきたいと思っておりますので、また御意見を賜ればというふうに思っております。

○青柳委員長

それでは、大体、今日の議題に関しましては、皆様から御意見もいただいたと思っておりますので、次のアクション&レガシープラン、東京2020参画プログラムについては、7月25日に開催されます理事会の決定までの間、本日はいただいた意見などをすり合わせながら、関係機関と調整していきたいと思っております。

最終的には、調整は事務局と委員長に御一任させていただいてよろしゅうございますでしょうか。

(異議なし)

○青柳委員長

どうもありがとうございます。

それでは、議題の2で、今後の文化・教育委員会の運営につきまして、事務局のほうから御説明いただきたいと思っております。

○小幡部長

事務局から説明させていただきます。

資料3を御覧いただければと思います。1枚で両面になっているものでございますが、今後の文化・教育委員会の運営についてということでございます。裏を見ていただければと思います。

先ほど、今中委員から御指摘、御意見いただきましたので、そことダブルのところもございまして、今後の運営といたしましては、これまでと同様ですが、この委員会ではアクション&レガシープランをしっかりと全国に展開していくために、いろいろ御意見をいただくということが中心になるかと思っております。東京2020文化オリンピックや教育プログラム「ようい、ドン！」など、さまざまな、今後、展開されるアクションを具体的に検討いただく。そのために、よりもう少し少人数でとか、もう少し頻繁にというような場合には、これまでと同様ですが、ディスカッショングループなども、必要に応じて適宜、開催をさせていただきたいと思っております。

また、先ほどスケジュールのところでも少し御説明させていただきましたけれども、今後リオが終わりまして、4年間かけてこのプログラムを展開していくわけでございますが、2020年の大会の年の、大会前、恐らく4月か5月ぐらいから3カ月間ぐらいかけて、フェスティバルというような形で、文化についても教育についても、より集中して取り組みをやって

いきたいと思っております。

どちらかといいますと、このフェスティバルのときは、より組織委員会がもっとイニシアチブを取るといいますか、大会と密接に関連いたしますので、大会におけるテーマとか、そういったものを含めて、いろんなイベントを東京だけでなく全国でやっていきたいと考えております。まだ少し先の話ということになりますけれども、そのフェスティバルで、こういったテーマでどういうイベント、どういう形でやっていくか。そういったことも、これから皆様に御意見をいただきたいと考えています。

そこで、2番、具体的な運営方法でございますが、アクション&レガシープランというのは先ほど説明させていただきましたように、毎年改定をして、よりバージョンアップをしていきたいと思っております。それを大体、7月に毎年改定していきたいと思っておりますので、その際に委員会を1回やると。また、年末に、こういったアクションがやられているのかということブラッシュアップするような場を、12月ごろにやらせていただく。ですので、年に2回というのを基本的に考えております。また、これも適宜、必要に応じて、場合によっては3回とか、そういったことも含めて柔軟に対応していきたいと思っております。

ですので、今年については、次回は12月ごろを予定しておりますので、その際には、16年の10月以降アクションが始まる、こういったイベントが行われているのか、そこら辺の中身を具体的にお伝えいたしまして、議論いただきたいと思っております。

○青柳委員長

どうもありがとうございます。

今のような、大体スケジュールで進ませていただきたいと思いますのですが、この件に関しまして、今の委員会の役割であるとか、あるいは具体的な運営方法などについて、御意見がございましたら、ぜひお願いいたします。

この間、最初のあたりでコシノジュンコ委員もおっしゃっていましたが、海外とのことなどでですね、菊乃井の村田さん、一昨年バリのギメで展覧会をやりましたよね。

○村田委員

ギメで日本料理と魯山人を2カ月やりました。

○青柳委員長

魯山人の、あのようなものはこれからも海外発信で、オリンピック・パラリンピックと絡めてやると、非常にいい四つの柱のうちの一つになるんじゃないかという気がします。

それから、今、例えば奈良県は、奈良南都六大寺にある仏像を、オリンピックのために外に持っていき、ギメ美術館と大英博物館で大体話がついているようです。そういうような幾つも、いろんな組織・団体が計画しているので、それをなるべく早くこちらでキャッチをしながら、いろんな形で、認証するということもおかしいですけど、協力して海外発信を広めていくというようなことも、これからどんどんやっていく必要があるのではないかなと考えております。

○コシノジュンコ委員

早速ですけども、来年2月22日から3カ月、ギメ美術館で江戸から現在までということで、実際には江戸の女、Femme d'Edoというんですけども、江戸時代、女性がすごく華やかに活躍して、いわゆるファッションですね。ファッションという言葉はその当時はないでしょうけれども、華やかにふるまってすばらしいアーティストがたくさん出てきて、競って小袖というのがたくさん出てきたわけです。小袖展というふうにもわからないので、Femme d'Edoと、江戸の女から現代までということで、現代は私の作品を出しますけれども、そういう意味で、早速もうそのような事業があるんですけども、今からでも、一緒にやれるんでしょうか。もう日にちは決まっております。2月22日から3カ月です。

○青柳委員長

10月から発信するから、うまくすればコラボはできますよね。

○中村局長

はい。世界の方に、日本の取り組みを知っていただくのは非常に大事だと思っております。先ほど山崎委員のお話とも関係するんですけども、最大のPRというのは、いろんなイベントについて、このエンブレムをフィーチャーしたマークがつかれて、その下にTOKYO2020のマーク。参画というのはまだ仮称ですけども、何とかプログラム関連事業みたいな文字がマークとともにいろんなところで見られて、大会が始まるんだなという気持ちを盛り上げていくのが一番のポイントだと思っております。

それが東京だけではなくて、国内だけではなくて、海外でできれば非常にすばらしいことだと思っております。

ただ、恐らく一つ留意点があるとすると、海外でこのマークを展開するときには、日本でJOCがありますとおり、フランスのオリンピック協会がありまして、そことコラボレーションを取るという手続が必要になるのではないかと考えております。こちらは勉強をさせていただきたいというふうに思います。ありがとうございます。

あと、これに限らず、委員方々に、一堂に集まっていたかというものは、本委員会は年に2回かプラスアルファか、ワーキンググループやディスカッションということでも集まっていたかと思っております。ぜひ全国でいろんなイベントが開かれますので、そこにこの委員会のメンバーの方にどんどん参加していただいて、東京大会の魅力とか、もっとみんなで頑張っていたかというメッセージを出していただければ、非常にありがたいと思っております。先ほど絹谷委員がおっしゃったように、単にマークを与えているだけではなくて、この組織委員会全体が、もっと積極的にコミットしているんだというメッセージにもなると思うので、こうした御案内、秋以降させていただきたいと思っておりますので、お時間とかいろいろあるかと思っておりますけれども、御参画いただければ非常にありがたいと思っております。

○カミングス委員

リオデジャネイロが終わった後の盛り上げていくための、例えば帰国パーティみたいなものは企画しているんですか。あともう一つ、最近、東京でストリートパフォーマーが増えているように思うんですが、大体、人がおもしろがって見ると、気づくともう警察が来てやめさせてしまうんです。やっぱり文化プログラムは、全部公道のものだけではなく、やっぱり袖触れ合うものも多少の縁みたいな、お祭りの、お互いにすれ違ったときに、いかにまちの中が、東京すごくいいところだなと感じることが大事だと思います。あらかじめこういうところだけなら許されるとか、あるいはこういうグループなら大丈夫であることは知っているから、こういうところは許すとか、そうしたプログラミングが必要なことになってくるんじゃないかなと思います。

10年ぐらい前の東京だったら、アウトドアカフェは考えられなかったような時代もありましたけれども、大分アウトドアも楽しめるような都市になったから、そういうところもオリンピックのためによくしてくれているとか、もしかして地方からのいろいろな伝統文化や、あるいはアーティストがパフォーマンスもできる、立派な舞台じゃないかもしれないけど、人との笑顔のふれあいはできるとすごくうれしくなるかもしれない。

ちょっと緩和しないと警察が片づけに来ってしまうようなことも思いますので、お願いします。

○青柳委員長

どうもありがとうございます。確かに、そういうパフォーマンスはすばらしいと思うので、なるべく心広やかで、認めていきたいと思えます。

○桂委員

今、御依頼があればということでしたので、ぜひ大阪で頑張っている、また関西で頑張っている、地域で頑張っている人たちに声をかけていただきたいと思っております。

それと子どもたちに読んでいただく学習得本ということなんですけれども、世界に広がる日本の文化の中に、寿司とか桜の浮世絵がありますけれども、中学生に配る、世界に誇る和の心の中に、伝統芸能である能・狂言それから歌舞伎。伝統話芸である落語、それから、今日はお茶のお家元もいらっやっていますけれども、お茶、お花。そういうものが一切載っていないんですね。これはちょっと寂しいなと。世界に誇る和の心には、相撲が載っているんですけど、この写真を見るとみんな外国人力士で。それはまあ、外国人を受け入れたから、相撲協会としてこれは仕方がないことなんですけれども。もっと日本の誇る伝統芸能はたくさんあると思いますし、そしてそれだけじゃなくて、バレエとコラボするとか、いろいろなところとコラボしながら、日本の文化をもっともっと発信していきたいと考えております。

この2016年下半期のアクション一覧にはそういうのはありませんし、またそういうのをするとしたら、どういう劇場でやりなさいとか、経費はこれぐらいどうぞ使ってくださいとかいうのはあるのでしょうか。そういうようなことがあれば、我々はどんどん出ていきたいと思っております。

○青柳委員長

今ですね、組織委員会のほうでは、そういう具体的な補助ということはないんですが、内閣府のほうで機運を醸成するための基礎調査ということを行っております、今年度は上限1,000万で、30件のものに対して援助を行っております。その中には、能なんかで、少しいつともは違うやり方で、プロジェクションをやった中で能をやるというようなことのプログラムが、採択されたりしております。

ですから、来年はもっとそういうものも増えていくと思うので、いろんな組織委員会だけじゃなくてほかにもありますので、ぜひそういうのをチェックしていただきたいと思えます。

○小山委員

海外や地方の人たち、いろんな人たちに、広く東京だけでなく巻き込むということで、文化プログラムがある意味存在することがあると思うんですけども、先ほどの認証ということ、やはりある意味、何が文化プログラムかという、やっぱり認証されたものでないと、オリンピックに関連したものであるというふうにかウントされないということになると、やっぱり認証されたものが、先ほど松下さんもおっしゃったように、以前に目標とされていた20万となっていくのかなと。この2-4の資料の下の注意書きに、これが認証対象となるかどうかは、この後、別途判断ということ、やっぱり組織委員会さんが、これ東京都が出したものであっても、政府が出したものであっても、認証して判断するのかなという、やっぱり組織委員会がある意味おっしゃったような統括というスタンスがあるのではないかと。本当にパラレルというのが、それが可能なのかなと思ったことが一つです。

コシノ委員もおっしゃったように、海外との連携も含めた大規模な文化プログラムという、それこそ海外にもアピールするようなものにもなると思えます。

でも、逆にその20万を目指すこともあるし、地方の人たちにも浸透するというと、もっと小規模な、プロでなくても、どんな人でも、子どもでも、若い人でも認証してもらって、文化プログラムとしてやるということも、必要になってくるのかなと思うんです。その全てを、組織委員会というところが認証するという手続になると、これはちょっと20万という数字から言っても、地方に浸透するということを考えても、ちょっと無理があるのかなという気がします。

例えば、地方のそれこそ子どもやなんか、普通のおばさんとかが出したりするような、やりたいと思うようなものは、例えば地方自治体が認証して、どんどん、どんどん与えていけるというような、ちょっとランクというか、階段みたいなことも、それを全て上で、組織委員会さんのほうでコントロールするというような仕組みも、今後、展開をより具体的にしていくには、必要なことになるかもしれないというふうに思いました。

○中村局長

ありがとうございます。小山委員の、まさに我々その思いを持っておりまして、最初のところは国とか都とか、そういうところのイベントについての申請を受け付けてということになります。だんだんとこれが広がってきて、特に東京以外のところ、できるだけ多くの方に参画していただきたいと思っておりますので、我々だけでは恐らく、いっぱいいっぱいになってしまいますので、ぜひ全国の自治体の方々とうまく連携を取って、各々の団体がどういうところなのかというのは、

我々なんかよりよほど、地元の方のほうがよく知っていますので、いい意味で連携を図って、できるだけ多くの参画、マークを広げていきたいと思っております。

あまり内容がいいとか悪いとかで、絞るつもりはありませんで、できるだけ多くの事業を参画していただいて、その中でいい取り組みがあればそれが全国に広がるような、そういうサイクルにしたいというふうに思っております。

○杉野委員

ネーミングの件で、教育プログラム「よい、ドン！」ってすごくこれわかりやすいし、子どもたちにも説明しやすい愛称なんですよ。それで、先ほど御説明の中ではTOKYO2020フェスティバルの(仮称)ということでお話ございました。ネーミングとなると、日本のおもてなしの心とか祭りとかがテーマとなるのではないかと思います。これらは日本特有のものだとも思います。例えば、「わっしょい」とかいう言葉も、全員で盛り上げようとか、そういう意味合いも込めていると思いますし、何よりも子どもたちが、よし、何かやろうっていう意気込みが伝わる言葉じゃないかと、私は思っております。

いずれにしても、TOKYO2020フェスティバルの愛称というのを、少し広報にも、力を入れる意味合いでも、検討をしていかなきゃいけないのかと、個人的には思っていますが、よろしく願います。

○松下委員

今、中村さんからのお話で、地方にも行ってお話をということは、もちろんそういうお誘いがあると喜んでお伺いしますと、皆さんも思っていると思うんですけども。我々って、多分ここにいらっしゃる方は、いろんな海外に行ったりして、オリンピックの話をすると、英文でこの東京オリンピックについてみたい、本当に簡単でいいんですけど、文化プログラムについてみたい、冊子みたいなのがあったら。多分この委員の皆さん、いろんなところに行くと思ので、話ができるんじゃないかと思いますが、そういうのをおつくりになるようなことは。

○中村局長

まず、我々、東京大会がどういうものかということ海外の方にも知っていただくということで、このリオの大会を契機に、そういう資料を今つくりつつありますので、それができたらお送りしますし。おっしゃったように、文化プログラムとか教育プログラムとか、具体的なものが出来れば、今のセッションに従いまして、何か簡単な資料をつくっていきたいと思っております。ありがとうございます。

○SHELLY委員

私も他の委員の方々がおっしゃっているように、やっぱりすごくワクワクして、楽しみだなという気持ちです。この大きな会議が開かれるのも、3回目、4回目ですよ。なんですけど、1個だけちょっと、個人的にこういう会議に参加させていただくことがなかなかないので、残念だなと思ってしまうのは、今日ここで何を話し合っ、何を決めて、それがどういうふうになるのかというのが、ちょっと私はよくわからないので、いつも、じゃあ皆さんどうぞと言われると何を話したらいいのかな。何がどう、ここで何が決まるのかなというのが、何かもうちょっと具体的にそれが見えてくると、もちろんこの秋から始まるということなので、これからなんでしょうけど、せっかくいろんなデザイナーの方、大学の方、私はタレントですけど、いらっしゃるんで、どういうふうに協力できるのかなと考えております。

例えばこのフェスティバルが、本当にやるのであれば、力不足だと思いますけど、司会とかできるのかなとか。何かもうちょっと具体的に、どんなふうに参加して、どういうふうに盛り上げられるのかというのが見えてくると、もっともっと盛り上がっていくのかなと。12月の会までに、そういうふうに決まっていこうれしいなと、個人的には思っていますので、ぜひこれからもよろしく願います。

○青柳委員長

ありがとうございます。ここにいらっしゃる委員の皆様一人一人が、アナウンス、宣伝マンとしてですね、自分の周辺や、あるいはどこかに行ったときに、この文化オリンピックを広めていっていただきたい。それから、趣旨を広めていただきたい。そういう意味で、それぞれの方々がそれぞれの役割を担っているので、どうぞよろしく願います。

○千委員

各都市部に、現在、コンベンションビューローというのができてきていると思います。私は京都のコンベンションビューローの副理事長をさせていただいております。おかげさまでインバウンドが大変アップいたしまして、一部の業界は大変喜んでる現状であります。

本来、コンベンションビューローは、MICE戦略というものを第一に押し出して、京都会館における国際会議の誘致、また国内での各学会の誘致ということ第一に運んでまいりましたが、あわせて、先ほど申し上げました、MICEに伴いインバウンドがたくさん出てきたという形で、今、オリンピックに向けまして、その今の土台の上に、もう少し強固な、そういう、どのような対応でもできるようなものをつくってこういう形を取っております。

参考までに、京都のコンベンションビューローは、理事長は職前商工会議所会頭、今ですとムラテックの村田純一さん。商工会議所の会頭と国際会館の館長と副市長と副知事と、私で、この5人で副理事長を務めるという形でさせていただいておりますが、その中で、コンベンションビューローが、今、非常に機能し出している中で、コンベンションビューロー、またはそれに同等の組織というものが、大なり小なり、中核都市、また地方都市にもあるんじゃないかと思っております。

それで、先ほどから皆さん方のお話を承っておりますと、やはり中央からの理論というのも多いと思いますが、ダイレクトに、地方にいろんなことを投げかけていっても、やっぱり斜に構えるところは斜に構える。

そういうような中で、やっぱりコンベンションビューロー的なものは各まちにあるのならば、また商工会でもいいと思っております。そういうところに、これはこの組織委員会、または東京都さん、そういうところから今までアプローチというのをなされたことがあるのでしょうか。私どもの京都のほうは、今、独自にそれを運んでおりまして、もし何かそういうような連携、ま

たは協力体制をとということならば、4年しかありませんし。

やっぱりまず、まとまるどころからまとめていき、池に石を放ったときに、波紋がじわじわ、じわじわ広がっていくように、どのまちにも同等にするのではなくては、波紋が広がって行って、4年後にしっかりと全てのまちに波及が出るような、そういうこともお考えになったらいかがかと。

質問というか提案というか、申し上げさせていただきます。失礼しました。

○青柳委員長

むしろ提案として、我々拝聴をしたいと思います。そして、実行に移していきたいと思います。ありがとうございました。それでは、この辺りで、TOKYO2020大会ボランティアプログラムの方向性について御議論をいただきたいと思います。まず最初に、手島局長のほうから、御説明よろしくお願いたします。

○手島局長

総務局長の手島でございます。よろしくお願いたします。

現在、組織委員会におきまして、大会ボランティアプログラムの方向性について、内部で検討しているところでございます。資料は、委員の皆様への机上のほうに配付をさせていただいておりますので、御覧をいただければと思います。資料4でございます。

中身に入ります前に、まずオリンピック・パラリンピック競技大会は、選手や大会関係者だけではなく、子どもから大人まで、さまざまな人々の参加によってつられます。TOKYO2020年大会を成功に導くためには、大会運営に必要な人材としてボランティアの協力が不可欠でございます。大会の基本計画におきましても、必要なボランティアを確保し、育成することを人材管理の主要目標として考えております。

本日は、その方向性のたたき台、まさに素案でございますけれども、これについて説明させていただきまして、委員の皆様から意見を頂戴し、大まかな方向性について、まとめさせていただきたいと考えております。そして、この大きな方向性につきましては、今後、開催されます理事会のほうにもお諮りをしていきたいと考えております。

また、8月から行われるリオ大会におきまして、ボランティアプログラムの内容を検証した上で、10月以降になりますけれども、ホームページ上に挙げまして、その方向性について、さまざまな皆さんから広く御意見を頂戴したいと思っております。最終的には2018年、大会の2年前にボランティアの募集要項を発表いたしますので、そこに反映をさせていただきますと考えております。

それでは、資料4を1枚めくっていただきたいと思っております。まずは、ボランティアについてですが、一口にボランティアと申しましても、さまざまなボランティアがございます。このうち、組織委員会が企画・運営をいたしますのは、左の上のほうに書いてありますが、大会ボランティアと呼ばれるものでございまして、ロンドン大会など過去の大会から積算をいたしますと、約8万人のボランティアが必要だと推計されます。

一方で、各会場がごさいます自治体が募集・採用していくのが、都市ボランティアと呼ばれるボランティアでございます。主に大会の会場の外で、道案内や観光案内をするボランティアの方々です。ちなみに、東京都が、今、企画をしております都市ボランティアは約1万人と言われております。それ以外にも、例えば事前キャンプを行う自治体などが、企画・運営をするボランティア、全国でさまざまなボランティアの方々活躍されると今、言われております。

次に、2ページになりますが、組織委員会として、大会ボランティアを考えますときに、まず私どもは、大会の運営の重要な担い手だと考えております。ですから、ユニフォームを支給したり、研修を充実させていきたいと思っております。

また、大会ボランティアは、大会の印象を決める大事な構成要素であると言われておりますので、東京大会におきましても、できる限り多くの方々に御参画をいただきまして、大会の盛り上げを創設していきたいと考えております。

一方で、ボランティアですから、やっぱり原則は報酬なく無償で、当日の宿泊ですとか東京までの交通費、こういうものにつきましては自己負担ということを原則と考えております。

それで、3ページ目に参りますが、ではどんなボランティアに役割があるかということでございまして、本当に多岐にわたるボランティアが必要になってまいります。ここでは、その一例といたしまして、イベントサービスから、四つほど掲げてございまして、これ以外にもさまざまなボランティアが必要になってまいります。

4ページをお開きいただきますと、ここからが、今回お諮りする内容についてでございますが、東京大会における方向性を検討するに当たりまして、内部で東京らしさを演出していく、出していくというのはどうしたらいいかということで考えてまいりました。その基礎、礎となりますのは、やはり大会の基本計画に掲げました大会ビジョン。左のほうにございまして、三つのコンセプトからなっておりますが、この大会ビジョンが一つです。

もう一つは、東京スピリットというのがございまして、これは組織委員会が、出身母体もさまざまな方々から成り立っておりますので、その職員が大会の成功に向けまして、共有すべき価値観を明確にし、組織委員会の運営・人材管理を行っていくことを目標に策定したものでございまして、ビジョンの実現に向けて昨年の4月に策定したものでございまして、

東京らしさを議論する上で、この二つの理念を踏まえまして大会ビジョンを考えました。一つは、全ての人が自己ベストを目指す。またSpiritのほうからは、One Team。この二つからですね、ミッション案といたしまして「1つのチームで自己ベストを実現する～アスリートの、観客の、自分自身の～」これを案としてつくりました。ぜひこのミッション案につきましても、御意見を頂戴できればと考えております。

次に、5ページをおめくりいただきたいと思っておりますが、大会ボランティアに望まれる、求められるものについて書き出しております。まずOne Teamということも掲げましたけれども、そのためにもコミュニケーション能力。これは重要だと考えております。また、語学力。あとは年齢ですとか、参加をしていただける期間等々、七つものを掲げてございまして、

次に、6ページになりますが、今後ミッションを実現するための具体的な施策につきましては、三つのフェーズに分けて検討していきたいと考えております。大会前、大会直前～大会中、大会後でございますが、特に大会後につきましては、ロンドン等に比べますと、東京におきましてはやっぱりボランティアの文化というのが根づいていないといえますか、そういうところがございまして、この2020年大会を通しまして、爆発的とは申しませんが、ボランティアをする経験

をした方がたくさん増えてまいります。ですから、この方々が2020年、2021年以降も各種のスポーツイベント等で活躍していただきまして、レガシーとしてボランティア文化が定着をしていく。そのような取り組みを検討してまいりたいと考えております。

次に7ページになりますけれども、今後の全体のスケジュールでございます。具体的なボランティアの募集につきましては、冒頭申しましたが大会の2年前、これはロンドン大会もそうなのですが、2018年8月ごろを予定しております。その後、面接を経て採用を行ってまいります。その中でも、専門性の高い、例えば医療サービスですとか競技をサポートするボランティアなど、こういうボランティアの方々や、またボランティア8万人も募集をいたしますので、そのリーダーになっていただくような方。こういう方々は少し早目のタイミングで、採用・育成を行っていききたいというふうに考えております。一般の方々は、大会年になります2020年に入りましてから、オリエンテーションですとか、各種研修・教育を行っていききたいと考えております。

最後になります。冒頭で申しましたように、委員の皆様からは、ぜひ2020年大会のボランティアの方々に、こういうことを期待したいとか、また先ほどもおっしゃったミッションについて、また望まれるもの等につきまして、御意見を頂戴できればと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

○深澤委員

ちょっと、伺いたいのですが、ロンドンというのはチェンジメーカーですか。

○手島局長

ゲームズメーカーです。

○深澤委員

失礼しましたゲームズメーカーですね。その8万人のうち、大学生がどのぐらい活動したかというデータはおありになりますか。というのはですね、東京オリンピックは7月24日開幕ですよ。その前の準備を入れると、この時期というのは、大学の多くは前期の試験中です。場合によっては、4年生になると就職活動。そうすると、オリンピックのボランティアに行きたいけれど、まさか試験に出ないでボランティアには行かないですよ。

そうすると学事日程を入れ替えるとか、あるいは就職活動の時期をどうするかということまで考えなきゃいけない問題と考えます。要するに大学生の割合がどのぐらいなのか。これがロンドン8万人の中の、500人、600人なら個別対応で、何とかなるかもしれませんが、やはり大学生はボランティアの一つの軸じゃないかと思っています。特にこの暑い時期ですから、一番体力のある大学生がボランティアを支えるだろうと思います。文科省さんとか、経産省さんも含めた大きな変化になるかもしれませんが、大学生がこのボランティアにつける環境も整えてあげないと、ちょっと厳しいかなというのを率直に感じたところでございます。

○手島局長

御意見ありがとうございます。今現在手元にロンドンの大学生の数は持っていないのですが、先生のおっしゃるように、やっぱり幅広く、学生も含めましてボランティアに参加していただきたい、環境整備というところは、ぜひ整理をしていきたいと思っております。文科省も初め、特に学生の場合には試験があったり、また例えばボランティアを単位として認めてもらいたいとか、いろいろと出てくるのかなと考えておりますので、そういうことも含めまして、これから調整をさせていただきます。

○田中委員

今の御説明にございましたとおり、この大会ボランティアは、大変、重要な大会運営の担い手であるし、それに期待される要件はいろいろございますので、大変厳しい人選だと思います。

それで最終的に8万人を決めるとなると、最初の方はかなり、3倍、4倍の人間になりますよね。そうしますと通常の募集・採用・面接というような、膨大なものになると思いますけども、何か特別なことをお考えになっていらっしゃるんですか。

○手島局長

ロンドンの例も参考にしているのですが、ロンドンでさえ実は7万人の募集に24万人の方々が応募をされたというのがございまして、まず書類選考で3分の1ぐらいとなりまして、それで面接をしたと聞いております。そのようなやり方も参考にしながら、これから選考方法も含めまして、検討をしていきたいと考えております。

○村田委員

料理のほうは、まだ何も決まってないんですけども、選手村は誰がやるのか。料理人だけでも1,200人ぐらいは確実にいるという話にはなってるんですけども、それに伴ういろんなイベントについて、もう何かがあるやろうと思って、その期間はみんな待機しているんですけども、いつもぎりぎりなんです。

急にミラノに行けと言われてミラノに行かないかん。予算はないよと言われてボランティアで行かないかんということが起こってくるわけですよ。日本料理アカデミー300人、全日本食学会500人、全日本食学会の理事は、全部の和洋中を問わず、粉もん・鉄板から洋菓子・和菓子までの50人は、その長ばっかりです。そやから、早いこと言うてあげて、それぞれの団体を動かすというのは、全日本食学会はできるんですけども、ある程度どこら辺で、どういうイベントを組んでいって、料理人がどれぐらいいって、どういうイベントをやるのかというのを考えていかないと、それから複合で、文枝師匠と一緒に何かやるとか、コシノ先生と一緒に何かをやるかとか言うても、いつでも急にはなかなか人も出せないですし、ボランティアでそれをやるためには、会でそれなりのお金は用意してます。団体でね。

今もう、それは何かとあるやろうという用意はしてますけども、何かあるのかわけがわからんというような状態で、何かありましたかって、これあんまり出られませんけども。いや、何も無い、まだと言うてるだけで、それを早いこと言うてもら

えると、段取りがつけられる。そうすると、みんなそのつもりで、仕事をそれぞれやっていますから、急にこのときに料理人1,000人要ると言われてもなかなか難しいんで、よろしくお願ひしたいと思ひます。

○青柳委員長

わかりました。賄ひ料理だけじゃなくて、ちゃんとした準備を踏んだものでやりたいと思ひるので、よろしくお願ひします。

○宮田委員

ボランティアに関しては、今この、なかなか要綱も大変だなと思ひていて。要件が最低1日8時間で10日間活動というのは、これは学生さんにしてもそうですが、そうでなければ不可能な拘束期間なのではないか、ただ気持ちとしては、みんな何かお手伝いできるんだったら、1日だけでもとかというのは、多分そういう場を何か別の形ででも考えていったほうが、盛り上がる契機にはなるかなとは思ひます。

○今中委員

ボランティアのところで聞かせていた、この1日10時間云々。多分これ男子の成人を対象にされているのかなと僕は思ひて見ていたんです。障がい者の方々のボランティア精神って旺盛です。今これオリ・パラが一つになってというテーマなのでね、そういう意味では、障がい者の方々がボランティアにもなれるぞと。それをサポートする健常者の方もいるぞという意味では、恐ろしく一体感が出てくると思ひますので、その辺ももう少し時間と、あとスキルの問題ですね。その辺ももう少し段階を得たような設定をされたほうが、今後、参加しやすいと思ひます。

○手島局長

どうもありがとうございます。

これも本当に、まずはロンドン大会がベースになっておりました、今、貴重な御意見を頂戴しましたけれども、本当に障がい者の方でも、ぜひボランティアに参加していただきたいと思ひておりますし、原則は原則でございますけれども、バリエーションについても考えていきたいと思ひます。

○青柳委員長

どうも。それでは、この小中学生からのポスター募集企画について、まず事務局のほうから御説明いただきたいと思ひます。

○小幡部長

資料5を御覧いただければと思ひます。小中学生からのポスター募集企画というものでございます。

1ページをおめくりいただければと思ひます。これは昨年度もやらせていただいております、ポスターについては2回目。2年前は作文で、小中学生から募集をさせていただいて、取り組んできたところでございます。

1番最後のページに、昨年度の実績がございますが、基本的には小学校5年生、中学校2年生を対象にしながら、ほかの学年の方の募集も受け付けるといふことで、全国の小中学校、また特別支援学校、さらには海外の日本人学校にも案内を出しまして、募集をしたところでございます。

昨年度は、教育委員会を通じて各校に依頼したところでございますが、小学校長会、中学校長会にもいろいろ周知とか、そういった点で御協力をいただいたところでございます。応募数として、1万1,493点といふことで、たくさんのお応募をいただきました。

それで、今年の企画でございますが、作文、ポスターをやりましたが、ポスターのほうは、いただいた後に、いろんな形で活用といふますか、御紹介ができるといふことで、今年もポスターといふことで考えております。

ちょうど夏休みの間にリオのオリンピック、さらにはパラリンピックがございますので、今年は「リオオリンピック・パラリンピック大会で心に残ったこと」。さらに「東京大会に期待すること」といふことをテーマにした、作品を募集したいと思ひております。募集対象については、昨年と同じく、小学校5年生、中学校2年生を基本としつつ、全国の小中学生、特別支援学校、さらには日本人学校にも御案内したいと思ひております。

周知方法といましては、また今年も教育委員会の御協力をいただき、教育委員会を通して各学校に案内をしていただきたいと思ひております。去年と同じやり方でございますが、全ての作品を、本来であれば組織委員会に送っていただき、それを我々が活用するといふことが基本ではあるんですけど、なかなかそれが難しいといふこともございますので、50作品のうち1作品を選んでいただくといふようなやり方で、組織委員会に送っていただくこととしております。ですので、100作品一つの学校で集まれば2作品、150作品あれば3作品を組織委員会に送っていただくような形になります。

また今年例えば都道府県ごとに優秀賞というのを選出し、その中からさらには特別賞だったり、最優秀賞といふようなものも、何らかの形で選んで表彰していくような形ができればと思ひておりますが、基本的には各学校で、ぜひ表彰式などをしてくださいといふような形でお願ひをしております。

スケジュールは、大体このようなスケジュールになっておりますが、リオが終わる11月までにいただくような形になっております。活用についてでございますが、ここのフロアでも、会議室を出たところでポスターを幾つか掲示させていただいておりますが、我々のホームページなどでも活用したり、いろんな映像のコンテンツでも使ったり、またいろんなイベントでも掲示をしております。自治体、東京都やそれ以外の自治体からも、ぜひ使わせてほしいといふことがございましたので、そういったイベントや広報でも使って、せっかく子どもたちに一生懸命書いていただいた作品ですので、有効活用をさせていただくような形で今年度も考えております。

○絹谷委員

これを見ましても、やっぱり非常に日本という国、内向きになっております。海外の日本人学校の日本人から募集していると、じゃあ日本人だけだといふふうな感じになっておりますね。

この辺をオリンピックを機会に、外国人もいっぱい見えるわけですから、ユニセフ、それから商社、そういうところにもお声掛けいただいて募集をかければ6万点。1万点が多いというふうな感じを皆さん持っておられると思いますが、紙に書いた絵を1万点集める。その中に、やはり日本は、日本は、日本はというふうな感じがあり過ぎて、国際的に広がれない日本のこの特徴というんですか、島国の特徴というんですか、そういうのが非常に出ています。

量に対する考え方も、1万点という量は多いと、私たち日本人は考えますけれども、これだけオリンピックのような大きい、世界に開いたものでございますので、やはりここはぜひ、ユニセフ、それから海外に出ている商社、大使館、そういうものを使って、残りの5万点は海外の子どもたちの絵を集めて、スポーツと平和というような題を与えるなりして、全世界の子どもたちの絵を、日本に持ってくるというぐらいのことは、オリンピックという体をつけた場合、それぐらいのことをしないと、何か日本、地方政治みたいな感じになっていますね。

ですから、6万点とか10万点とかという数字を恐れてはいけません。集めるのも、そんなに大変なことじゃないんですね。各国がまとめてやってくれますので、大したことはありませんね。

そうすると、非常に日本の子どもたちも外国の子どもたちの絵を見て、どこが違うのか、どういう色感が違うのか、どういう心の構え方が違うのか、心が開いているのか、いろいろなことができると思います。ぜひ、これをもう一つ、国際的に広げていただければいいと思います。

○榎本委員代理新庄恵子様

感想と御質問を一つさせていただきたいと思います。やはり子どもたちが、自分で絵画なり作文を書いたり、作品をつくったりするということは、関心を高めるいいことだと思っています。教育活動の中でも、交通安全のポスターとか薬物乱用防止のポスター、環境教育、人権教育など、子どもたち自身の手でつくったり考えたりしています。このポスターにつきましては、継続的に関わっていくことができると思いますし、スポーツの関心を高めることや、ボランティアの心を育んだり、また日本の伝統文化に対する興味・関心を高めたり、世界の国々について関心を持つきっかけにもなると思います。ですから、こういうポスター、作品展のようなものをするというのは、とてもいいことだと考えます。

御質問なのですが、運営方法の一つ目のところに、学校ごとに50作品につき1作品を選出しと書かれていますが、先ほど50作品のうち1作品、100点あれば2作品ということでしたけれど、これは校種ではなくて学校ごとでしょうか。

全国の公立中学校は約1万校弱ありますが、小規模校、大規模校あり、人数が50人に満たないところもあるので、その場合には、一つの作品しか応募できないのでしょうか。よろしくお願いします。

○小幡部長

ありがとうございます。

すみません、50作品と、あまり正確ではない書き方になっていますが、例えば20人しかいない学校であれば、その中から20個出てきたらその中から1個出してくださいということで、最低でも一つは出していただけるような形でお願いします。学校種ごとに考えております。

○篠田委員

とても具体的になった部分と、原点に戻って、何かがどこか、全然自分でわからない部分というのが基本的にあって、その上に積み重なっていったような部分があるんです。私の中には、この委員会の中で、そうそうたる方たちがいらして、私は初め、この中で何かを企画をしながら、オリンピック委員会としての文化事業を企画して、例えばそれがどこのフェスティバルかわからないけれども、そういうところに持って行くのかなと、一時漠然と思ってたりもしたんですけど、どうもそうではないのかなということも、今、ちょっと、もやっと見えたりはするんですけど。

先ほど、地域に出てそれぞれが皆さん広報マンですよ、どんどんPRしてください。でも、このエンブレムもまだ勝手に使っちゃいけない。オリンピック委員会って、委員と言っていいのかわからないのか、地域に行くとオリンピックですねって、言ったって、信用してもらえないのかわからない。であれば、名刺にどう書いていいものやら、悪いものやら。そのあたりの整理も、全く実はできていないんじゃないかなと思うんです。

そろそろ、委員会の中では、例えばエンブレムを使ってもいいんだよとか、オリンピック委員というのを肩書に書いていいのかわかるということすら、伺ってもまだそれはちょっとはっきりしていませんと答えられてましたので、そのあたりが、もう少ししたら整理がつくのかなのか。それもちょっと伺いたいことであります。

本当に、大きなところで基本的な概念というのを考えていくことも必要なのですけれども、どこか具体的な基盤というのが、目をつぶりながら進んでいっているところがあるんじゃないかなという、ちょっと疑問があるものですから、そのあたりのことを伺えれば。

これから次の委員会を開かれるまでにはまだ時間がちよつとある。そのときに、じゃあ我々は子どもたちと一緒に何か機運を上げていくにはどうしたらいいのかなと思いました。

それで、具体的にこのマークなり委員会という名前を使っていいんですかと問い合わせたところ、まだちよつと待ってくださいと言われたものですから。公にされてるんじゃないのかなと、ちよつと疑問でした。

○中村局長

確認しまして、これは委員だけではなくて、皆様にきちんと整理をして、何ができて、何が難しいのかといったところ御連絡をいたします。よろしく願いいたします。

○青柳委員長

よろしく願いいたします。それでは、大体、今日準備した議事内容等は、もう時間も来ましたので、このあたりにしていただいて、最後に、事務局のほうから事務連絡をよろしく願いいたします。

○小幡部長

本日は、いろいろ御意見をいただきまして、ありがとうございました。

アクション&レガシープラン2016につきましては、皆様からの御意見も踏まえまして、この後関係機関とも調整をし、今月25日の理事会に審議していただき、承認いただきましたら公表する形で考えております。

また、今日お配りしている資料のうち、机上配付の扱いになっているものは、まだ調整中ということでございますので、取り扱いには御注意いただければと思います。また、プランをまとめるとは言いますが、まだまだこれから2020までが、いろいろプランをバージョンアップしたり、いろんなイベントをしていくことになりますので、適宜、御意見ございましたら事務局宛てまでお送りいただければと思います。

あと、机の上にニュースレター「2020たより」を配らせていただいておりますので、御覧いただければと思います。創刊号でございます。これから年に4回程度、こういった形で発行して、関係機関等にお配りして、皆様に組織委員会がどんなことをこれからやろうとしているのか。そういったことを御紹介していきたいと思っております。

お配りしている資料と議事録につきましては、後日、組織委員会のホームページで公開させていただきます。

いつも記者の方々にプレスブリーフィングを会議の後やっておりますが、本日は記者の皆様オープンでやっておりますので、ブリーフィング自体は行いませんので、個別のお問い合わせについては、事務局のほうで対応させていただきます。

参画プログラムの募集日、キックオフも夏から秋にかけて、先ほど説明させていただいたとおり予定しております。中村のほうからも話をさせていただきましたが、委員の皆様にも、いろいろな形で御協力をいただきたいと考えております。先ほどの委員会の役割、また委員の方々が具体的にどういうことに関われるのか。そういったことも少しきちんと整理した上で、また12月の委員会の場で、御報告・御意見をいただければと思っております。

どうも、本日はありがとうございました。

○青柳委員長

それでは第3回目の文化・教育委員会をこれで終わりたいと思います。どうもありがとうございました。